思い出

宇野三代（本町・76歳）

敗戦後四十六年歳月の流れは早い。当時三十才の私は女子四人の母で東京の北千住に在住していました。「がんばりましょう勝つまでは」の合言葉に戦場はもちろん内地も警防団、愛国婦人会、主婦様々に訓練があり、ほうたい巻き防火用品用水の点検、夜は燈火かんせい黒い布を電燈の笠に掛け明りが外にもれないように黒いカーテン、当時はラジオ放送が頼り。店をかたし一角に防空壕を掘り苦労しました。ついに学童疎開がきまり小学四年生の長女を山形の親せきにあずける。

自分も三人連れて早く行くように主人に云われました。次第に暗い影がたゞよい淋しくなり、隣組となる近所の人々も子供さんの居る家はそれぞれ地方に疎開し残るは若い人と老人ばかりになり、主人も足が悪く警防団員、じゅう後の守り、ゲートルを巻いたまゝ待機、サイレンの音が不気味で聞く度に生きた心地がなく只あわてるばかりでした。当時、私の両親は船橋に住んで、弟四人は兵役にあり、長男は男の子と妻を親にあづけて戦場へ三人の弟も召されて戦場へ出征し、親はありがたい。空襲のつど三人の孫と私を案じ早く山形へ行く様に、私も両親の身が案じられ家を離れるのがとてもつらく、みじめな思いでした。身が軽く一人なればとしみじみ涙しました。

十二月に入り一大決心をして小物とおむつをまとめ末の子を背に二人の手を取り疎開する事にきまり、隣の人も同じ意見で話がまとまり二人の主人に自転車で見送ってもらい、北千住より上野駅まで歩きました。午前二時に家を出、駅に着いたらすぐ一番電車がホームに入り改札口の混雑、人の波に自分たちは歩いて来て良かったとつくづく思いながら、十番目位に並び隣の人たちも行く先が違うので別の列にならびお互いに目と目で言葉を交わしお別れをしました。見送りの主人もホームに入れないので心配したでしょう。東京をはなれ宇都宮辺で安心して急に空腹をおぼえ用意して来たおにぎりを子供と食べ、福島駅でホームが変わり階段があり発車のベルはなるし夢中で乗りかへ、子供の席だけ取り自分は立ってホッとしました。汽車もどんこう、たん線板谷峠では時間がかゝり石炭車トンネルが多く、人々の鼻は黒くなり煙も車中に入る。外は雪が降り急に寒さを感じる。朝東京は晴れ、冬の日は短く目的の駅に着いた時は暗く、ホームに足をついたとたん雪水でびっしょり、子供の足元を思い急がずに歩く、今は亡き人、改札口で名前を呼び迎えて下さいました。地獄に佛とは、この時のうれしさは生がい忘れられません。町も暗く子供たちも疲れてリヤカの上でぐっすりねむり私はリヤカにつかまってお話をしながら雪道を一里程歩きました。家中で迎えて下され、先ず長女の元気な顔、御一同様に厚く御礼申し上げる。もんぺをぬいだらヒザの下に皮がむけて血がにじんでいつぶ

つかったのか、アロエをつけてくださりその時はじめてアロエを知り現在も鉢植を大切にしております。一日長いつらい旅でした。すべて若い力、共に歩いた過ぎし思い出の一こま、遠くへ去って行きました。今は亡き両親は信こうが厚く四人の息子たちは元気に除隊しましたがのちのち長男はマラリヤにまけて他界しました。あの暗いかなしい戦争、永久になき様神佛に祈ります。

船橋に住んで四十六年七十五歳九カ月になりました。

当時四年生だった長女が十カ月程先に一人疎開をしておりました時の気持ちを表したものです。

尾崎昌子（55歳）

夕ぐれの上り列車に母想う
月の夜に又空襲か遠く悲しむ
黄昏の汽笛に涙　山形の里
母に似た人に出合って胸熱く
春山に父母想う心なぐさむ
雪道に足を取られて涙する
晩秋の山にさびしさ又つのる
父母を思い出す日は山を見ゆ